

共同住宅全焼 11人死亡

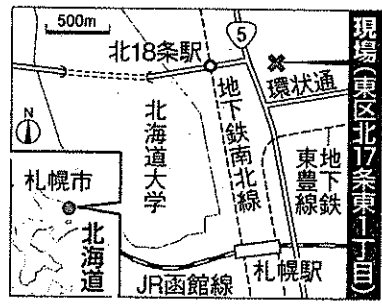
札幌 生活困窮者らを支援



火災のあった建物＝1日午前1時15分、札幌市東区、今泉泰撮影

札幌市東区北17条東1丁目で1月31日午後11時40分ごろ、生活困窮者らの支援を目的とした木造2階建ての共同住宅「そしあるハイム」から出火し、全焼して11人が死亡した。築年数が50年ほど経過した建物で、市消防局は「火が急激に拡大した」との見方を示した。北海道警は防火管理の体制に問題がなかったか、

業務上過失致死容疑なども視野に捜査を進める。



現場(東区北17条東1丁目)

▼33面迫る炎

道警は1日、消防と合同で現場検証などを実施した。共同住宅を運営するのは「合同会社なんもさサポート」(札幌市北区、藤本典良代表)。入居者は40、80代の男女16人で、男性8人と女性3人の計11人の死亡が確認された。このほか男女3人がけがを負って病院に運ばれたが、命に別条はないという。道警は連絡が取れない11人の居住者の氏名を明らかにし、安否の確認を進めている。

ただ、札幌市からは4回にわたって有料老人ホームの疑いがあるとして任意のアンケートを受けていた。市介護保険課によると、有料老人ホームの要件として、60歳以上の高齢者が1人以上入居、食事など一体的サービスを提供していることを定めている。アンケートによって有料老人ホームの認定を受けると、施設としての届け出義務が生じる。要介護3以上の人が一定数いる場合など、ケースによっては消防法上のスプリンクラーの設置義務が生じる可能性がある。市は共同住宅を運営する藤本代表から事情を聴く方針だ。

藤本代表は「スプリンクラーをつけようという話はなく、消火器で十分対応できるという判断だった。重大な火災を起こし、申し訳ありません」と話した。

現場は札幌市営地下鉄北18条駅から東約500メートルの住宅街。

デジタル版に動画

迫る炎 雪に飛び降り

支え合おう暮らし 暗転

生活に困窮しつつも、支え合いながら暮らしてきた人たちの住まいが、炎に包まれた。生活保護受給者が多く暮らす札幌市内の古い木造共同住宅で、11人が犠牲になった。低所得者が入居できる公的住宅が不足し、資金力の乏しい民間施設が支えているのが現状だ。

札幌・11人死亡火災

共同住宅「そしあるハイム」に通っている山田儀則さん(59)は1日未明、焼け崩れた建物を見て、信じられない思いだった。

ホームレスだった5年前、警察に施設を紹介された。朝はご飯と納豆、タマゴにみそ汁。昼は麺類。夜はご飯、みそ汁、おかず。調理師が温かい食事を用意してくれた。入居者の大友靖男さん(78)は食事を一緒にする中で、部屋にも誘ってくれた。足腰が悪いよう



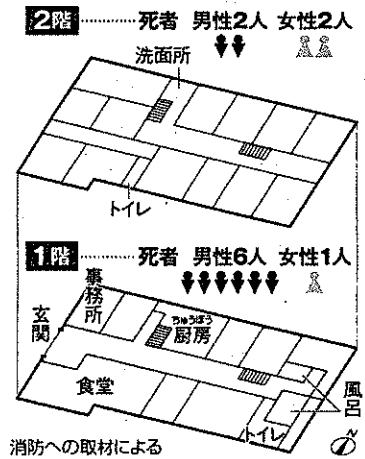
火災があった建物＝1日午前0時23分、札幌市東区、弓長理佳撮影

で杖を使って歩いていた。そんな人たちの暮らしが31日深夜、暗転した。施設の隣で飲食店を営み、119番通報した五十嵐隆之さん(70)によると、1階の目の前の部屋で、女性が一熱い熱い、助けて助けて」と叫んでいたが、窓には木製の格子があつて出

北海道警によると、火災後、大友さんと連絡がつかず、安否が確認できていない。山田さんは「大変な状況だが、助かってくれていれば」と案じる。

関係者によると、施設は生活困窮者の就労支援が目的で、高齢者や障害者、身寄りがいない人たちが暮らしていた。居室は一人部屋。浴室やトイレは共同で、食堂もあつた。病院の送迎や買い物の手助けなどもしていた。元入居者は「大半は生活保護や年金の受給者」と言う。誕生日会やカラオケ大会などが開かれ、いまの入居者16人も仲が良かったという。

「そしあるハイム」の見取り図 □居室



消防への取材による

そんな人たちの暮らしが31日深夜、暗転した。施設の隣で飲食店を営み、119番通報した五十嵐隆之さん(70)によると、1階の目の前の部屋で、女性が一熱い熱い、助けて助けて」と叫んでいたが、窓には木製の格子があつて出

厚生労働省によると、生活保護の受給世帯は昨年10月時点で164万29907世帯。年金が少ないなどの理由で貧困に陥る高齢者の世帯が約半数を占める。こうした生活困窮者が住まいを確保するのは、保証人の壁もあつて容易ではない。受け皿になるのが「そしあるハイム」のような民間が運営する安い施設だ。困窮者のための個室シェルターを東京都内で運営す

弱者の受け皿民間頼み

「そしあるハイム」の入居者で連絡が取れない方々は次の通り。北海道警が確認を進めている。

竹内正道さん(85)▽森ハナエさん(82)▽渡辺静子さん(81)▽大友靖男さん(78)▽沢田昌子さん(76)▽今井栄友さん(72)▽渋谷新一さん(72)▽川勝正幸さん(67)▽湯浅隆之さん(66)▽白府幸光さん(61)▽西山被佐雄さん(48)

■高齢者が犠牲になった最近の主な火災

2009年3月	群馬県渋川市の高齢者施設「静養ホームたまゆら」の火災で10人が死亡。犠牲者の大半は東京都内の生活保護者だった
10年3月	札幌市の高齢者グループホーム「みらいとんでん」の火災で入居者7人が死亡
13年2月	長崎市の高齢者グループホーム「ベルハウス東山手」の火災で入居者5人が死亡
15年5月	川崎市の簡易宿泊所2棟が全焼し、11人が死亡
17年5月	北九州市の木造アパートが全焼し、6人が死亡。生活保護の利用者らが生活の拠点になっていた
17年8月	秋田県横手市のアパート火災で5人が死亡。入居者の多くは障害者や高齢者だった

と別の女性の声があったが、消防車が到着する頃には聞こえなくなった。

2階の窓から男性が飛び降り、積もった雪の上に着地し、玄關から足が12時間かかった。

不自由な様子の3人が自力で出てきて、立ちすくんでいた。「火の手が強く、あつという間に全体に回った」と五十嵐さん。鎮火に

受給者が利用し、届け出がない施設も同年で1236になる。

困窮者の住まい確保に取り組む北九州市のNPO法人「抱擁」の奥田知志理事長は、民間の受け皿の実態について「誠実に頑張っている団体もあれば、貧困ビジネスもあり玉石混交なのは事実。新たな公的な支援の枠組みを作ることを求めている」と話す。

厚労省の調べでは、無料低額宿泊施設は2015年時点で全国に537あった。一方、複数の生活保護

2/2
2012